Curious Eyes of a Witch

情報をグラフィックデザインに成立させる創造者

未来に向けた「兆しのデザイン」

勝井 三雄 × **仁木 洋子** VOL.10

勝井 三雄：アートディレクター　グラフィックデザイナー

仁木 洋子：空間演出プロデューサー

ギンザ・グラフィック・ギャラリー「勝井三雄展：兆しのデザイン」(2014) にて

半世紀以上、現役でトップを走る

仁木　「2020年東京オリンピック開催」が決まりました。勝井先生は、1964年東京オリンピックのデザインマニュアル制作に参加され、その後の「日本万国博'70」、「沖縄海洋博'75」、「つくば科学万博'85」のアートディレクション、「花博'90」のシンボルマークデザインも手がけられ、まさに半世紀以上グラフィック界のトップを走り続けていらっしゃって、これは世界的にもすごいことですね。

勝井　僕が小学校４年生の時に第２次世界大戦が起き、終戦が中学２年の時。３年ずれていたら少年兵として予科練に行った可能性もあって、常に生命の危険に脅かされていたと思うのですね。だから、オリンピックのことを考える時に、代々木の競技場で戦争末期43年の秋、学生が動員されて、東条英機の演説のもとに７万人が大行進した。一説では、第２次世界大戦で軍に関係して亡くなった人は350万人、東京空襲や広島・長崎の原爆で亡くなった人を入れるともっと増える。そういう時代を共有しながら考えるんです。

1955年に大学を卒業し、コマーシャルの世界、味の素で６年間やって飛び出した。社会とデザインをつなげていくこと、その時代にデザインを本当に何に使うかということを知らせていくことをやったのが60年代でした。僕らの上の世代は、15～20歳違う人たち、そういう世代の間を埋めていくなかで、ある種の社会的な仕事、国家的な仕事に携わるチャンスが必然的に出てきた、そういう時代に出くわしたわけです。

仁木　グラフィックもまた、空間デザインもそうですが、1964年のオリンピックを目指してデザインは大きく動きましたね。そして、大阪万博に続いていく…。

勝井　1960年に世界デザイン会議が開かれました。初めて建築やさまざまなデザイナーが日本で150人、世界から150人、それまで雑誌や本に出ていた人たちが東京に集まって、社会的なデザインのイメージをお互いに語り合ったのです。その前年に東京オリンピックが決まっていたわけで、そういう経験を経て、マークがつくられ、オリンピックが開かれる４年先のイメージをつくりながら、社会インフラ自体を変えていくという大工事が始まったわけです。

仁木　東京では、都心の川が高速道路に変わったり…。

勝井　川を埋めることで、一番安く空間が得られたというわけです。

昔の青山通りは都電が走っていたけれど、それがマラソンコースになって競技場につながったのですよ。成長期で非常にいろいろな意味で、焦ってものをつくったのです。だからいま、その弊害がいろいろ起きています。

つくば科学博覧会「講談社ブレインハウス」内部 1985

「勝井三雄展：兆しのデザイン」2014：60年に渡る仕事の中で代表的なポスターと書籍を展示

仁木　次の2020東京オリンピックに向けて、これから整備されるでしょうが、50年前の弊害を解消したいですね。

勝井　整備といっても、次のオリンピックの場合は、次の社会をどうつくるかということが重要で、オリンピックはその過程です。オリンピックに集中してはだめ。

たくさん山積している問題を解決して10年後、20年後の社会をどう構築していくか。それが日本全体の中でどう位置付けられるかということの見通しができて、初めて、どこをどうするのか…となってくるでしょう。

仁木　私もすごくそう思います。悪い例として北京オリンピックの後でガクンと落ちてしまったでしょう。東京では、オリンピックを経て、さらによい社会につながっていくために、私たちも含めて未来のビジョンを描いて、社会のデザインを構築していきたいですね。

勝井　北京はあれだけのものができて…残念だね。

経済界はすぐに動くけれど、経済界が先にあるのではなく、ビジョンが先にあり、そこにお金がついてくればよいのであって、あるお金をどう使うかではない。

これからの日本は何を世界にアピールできるのか。日本の文化をどういうふうに世界に伝えていけるかが大問題です。

仁木　日本には原発問題があり、高齢化社会の先頭を行っているので、世界にエネルギーや高齢化社会についてのひとつのショーケースを見せるような、未来の設計図を描きデザインをしていくという、60年代とはまた別の重要な時期だと思います。

勝井　デザイナーだけではだめなので。きちんとリードできる人たちとコラボしていかないとね。

「空間」をロゴとしてデザインする

仁木　先生には、先ごろ一般社団法人日本空間デザイン協会のロゴデザインをしていただきありがとうございました。空間のイメージがとてもよく出ていると多くの皆さんに好評です。ご苦労をおかけしたようで…。

勝井　「若造のデザインのように、よくやったね」と言われましたよ。

仁木　実年齢に関係なく先生のデザインがお若いということですね。

勝井　若いか年寄りかわからないけれど(笑)。協会の名前を変えたのですよね。

仁木　50年以上「日本ディスプレイデザイン協会」でしたが、2012年にアイデンティティを刷新し、更なる飛躍を目指し名称も「日本空間デザイン協会」に変えました。

勝井　ディスプレイはメディアとしては中間で、業界にくっついた言葉なので一般の人にはわかりにくいね。そういう意味で領域がもっと広がり、皆さんにディスプレイではなくもっと違う要素が入っていることを知らせる意味で「空間」は現代的な言葉で、デザイン領域が重なってきているのが伝わりやすい。本の中にも「空間」があり、そういう意味での領域として「空間」という概念は相当に変わってきて、時を得た名前なので、それなりのものを出さなければいけないと思って大変に苦労し

ました(笑)。

仁木　これから50年先に向けて使っていくわけですから、「若い」や「新しい」の評判は、まさに的を射ています。大先生のデザインだから格式がある…では、これから50年は使えないわけですね。

勝井　使わないし、僕も現役でやっている以上、デザインはその時代の一つの鏡であって、これからを定義するもの。そういう意味で表現は、長く使えるものでないと意味がない。だからこそ、やらせてくれたのだと思うけれど。

仁木　はい、先生からデザイン案のボードをいただいた時は、心が躍り、本当に嬉しく思いました。

光の色の世界で表現する

仁木　先生の作品にはプリーツプリーツのポスターなど、ひと目で勝井三雄作品とわかる美しい光の色のようなアートポスター的作品ともうひとつのお仕事として、ピクトグラムや装丁がありますね。ご本人はひとつなのでしょうが、一般にはこの二つはまったく違うもので、片方しかできない方が多い…と思います。感性で表現をされる仕事と、理論的な仕事のふたつともすごい。

勝井　それは確かにね。いわゆる偶然に何か出てくるとか、光の部分は、僕の50年のデザインに対する姿勢の中に、いつも何か美意識の表現というのを考えていた。それがある形で出てくるのが光です。

　光は、非常にエモーショナルな、人にある種の感動を与えるのです。これはなかなか理性では考えられない。デザイナーはいつもそれを両面で考え、表現しているから、あるメッセージが伝わると思うんだね。それがなくなるとだめだと思うのです。一つ先を見越した美意識…誰でも持っている「気持ちがよい」とか、感情の流れの中でのやる気とか、何か根源的なものを刺激していくということですね。今は政治的なものとかいろいろな問題があるけれど、割り切れない世界にこそ、われわれがトライして、そういうものをつなぐものとして表現していきたいというのが光の色の世界なんだね。

つながるものを残していきたい

仁木　デザインはどんな時に浮かばれるのでしょう…。

勝井　夜型でね…寝ている時に夢が多いんだよ。色というか、何かに触発されて、ふっと「これとこれが関係ある」と思った時に、「あ、これをやらなくちゃいけないな」と思う。すぐにメモしておかないと忘れちゃう。

仁木　夢メモですね…朝起きると忘れているから…私もすぐにベッドでメモをしています（笑）。

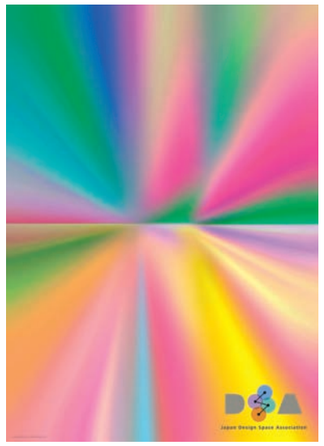
勝井　それが一番よいヒントになり創造につながる。必然性のあるものではないよね。抽象的な言い方ですが、非常にわかりにくいものが接点を持った時に、初めて違ったものに変わるという世界だと思う…それを大事にしている。

仁木　それが60年も続いていらっしゃるというのはすごいですね。先生の元気の秘密は？

勝井　理想、希望とそれに好奇心ですね。

仁木　そう…先生はいつも目がキラキラしていらっしゃる。これからなさりたいことは？

勝井　仕事をする時に、自分から勢いに乗らないと面白くないから、とにかく社会に対する一つの方向性に何か予兆、刺激を与えるような仕事をしたいなと思っています。遺伝子として次の世代につなげていきたいなと思っているわけです。見た人が記憶の底に残して、いつか何かにつながるかもしれない。そういうつながるものを残していきたいね。



DSA日本空間デザイン協会ポスター　2012

「勝井三雄展：兆しのデザイン」インスタレーションではポスターをモチーフとして、色と動きを融合したムービーを展開

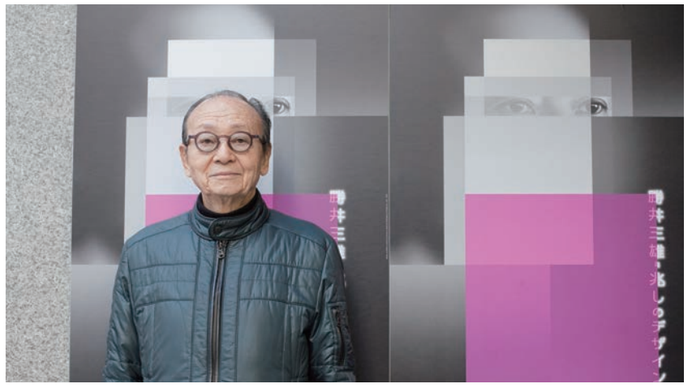
生まれたところはその人の起源 そこから出発するべき

仁木　先生の作品には日本人のDNA、日本の美しさを感じます。

勝井　感じてくれるかもしれないね。自然にそういうものが出てくる。僕はいつも自分の生まれたところからそれを引っ張り出して、デザインにつなげてモチベーションを高めていくということを強力にやっています。生まれたところはその人のアイデンティティの起源だから、そこから出発するべきだね。

仁木　東京日本橋のお生まれですよね。江戸の中心…。

勝井　僕は日本橋に生まれました。江戸時代から此の地の人口は百万人を超え、日本最大のリサイクル都市で、世界でも最大の都市でした。特に私の生まれた日本橋界隈は出版業や本屋、絵具屋がありました。実際小学校の友人は半片屋、寿司屋、のりや、乾物屋と言った河岸につながる息子達が多く、日本銀行や三越のあるエリアで、私の近所には中井紙店の倉庫や出版の博文社があったくらいで情報都市の中心をなしていたと思います。それに郭や芝居とあわせて、その三つが経済の中心だったと云われていたのです。現在の東京の原型がその当時から存在していました。そこには山東京伝の戯曲に書かれたシャレで粋を地で行く生活が作られていた。例えば、日本橋の隣の袂に後藤（５斗：米の単位で音が「ゴトウ」に近い）家と後藤家の屋敷があり一石（５斗＋５斗）橋となった石作り橋が今でもあるからね。京都の王朝文化とは違う、完全な庶民文化で、江戸が百万都市として成立した江戸後期に、その「粋」の文化は成熟していきます。



　その空気感の中で、学生の頃読んだ九鬼周造の「粋の構造」に大きな関心を持ちました。その哲学書には唯一のダイヤグラムで「粋」の構造が表記してありました。この図解図譜はデザインの形に出会った最初の事件でした。八つのことばを、直方体の八つの頂点に置いて、例えば地味対角線上に派手、上品に下品、渋味に甘味、意気（粋）に野暮と対比する言葉から江戸の美意識を微かにくみ取る事ができました。

　この会場は50年余のブックデザインを100点選んで展示していますが、私にとっては過去の長く蓄積された情報が秘められた空間で、現代を支える源泉の一部が書籍ひとつひとつとなって開かれるのを待ちこがれているように私には思えるのです。現代を暗示する「兆しのデザイン」として一階の多彩なひかりの映像とあわせて銀座で開かれたことに因縁を感じています。

仁木　先生がいつまでもカッコイイ理由は「粋」にあるわけですね。

　ますますお元気で、素敵な作品の発表を楽しみにしています。

　今日は展覧会「勝井三雄展『兆しのデザイン』」の会場で特別にお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

勝井 三雄 Mitsuo Katsui

アートディレクター
グラフィックデザイナー

1931年東京生まれ。東京教育大学卒業。味の素を経て、61年に勝井デザイン事務所設立。ビジュアルデザイン、主に情報をグラフィックに成立させる可視領域に関わる。デザイン教育やインターナショナル・コンペティションの審査員など幅広く活動。日本グラフックデザイナー協会（JAGDA）前会長・現理事。武蔵野美術大学名誉教授。日宣美賞、毎日デザイン賞、亀倉雄策賞、ブルノ、ワルシャワ、ニューヨークほか各国のビエンナーレでグランプリ、通産省デザイン功労賞、ライプツィヒ世界で最も美しい本展グランプリ、紫綬褒章など受賞多数。
www.katsui.co.jp

仁木 洋子 Yoko Luna Niki

空間演出デザイナー
プロデューサー

世界各国でのモーターショープースデザインや夢と感動を与えるさまざまな空間の演出デザイン、プロデュースを行なう。地球環境・資源保護に配慮したその仕事は、欧州でも評価され国内外で活躍。2006年から東京・丸の内・有楽町周辺で12月のチャリティ「ライティング・オブジェ」展を主催。311以降は東京・横浜で復興支援の継続を呼びかけ、思いをつなぐ光のアート作品を福島でも展示。2012年7月の「明治天皇百年祭～心のあかり」夜間特別参拝のデザインでディスプレイ産業優秀賞を受賞。(一社) 日本空間デザイン協会副会長。
www.illuminat.co.jp